



鹿沼の自然・栃木の旅

月報第39号

(2015年12月)



三木清『人生論ノート』（全集と文庫）
詳細は4頁から

北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼



活動案内・1

初日の出を見る会 ～茂呂山からの展望・山岳同定～

日 時：1月1日（金）AM6:20

場 所：花木センター大駐車場入口集合

服装等：しっかり防寒してきてください。

新築成った茂呂山山頂展望台より初日の出
と山岳展望を楽しみましょう。

見える山の山名を確認します。



(イメージ)

活動案内・2

足利・大坊山ハイキング ～山上城址と古墳群探訪～

国道 293 号線をたどって足利を訪ね、大坊山（だいぼうざん 標高 285m）に登ってみましょう。途中、田沼の先で出流原弁天池と弁財天、さらに足利に入ったところで榊崎八幡宮及び榊崎寺跡（国史跡）に参詣します。

榊崎八幡宮は足利義氏により正治年間（1199～1201）に創建されたと伝えられ、現在の本殿は天和年間（1681～84）の再建。明治時代初期の神仏分離令によって、榊崎八幡宮のみ現存しますが、八幡宮境内一帯が、足利義兼の創建以来、足利氏代々の廟所として崇敬された榊崎寺跡です。

県道 40 号線に入って山川町へ。長林寺に車を置いて大坊山の山頂を目指します。山頂には城跡があり、展望も楽しみです。冬晴れの日には東京のビル群も見えるはずで、おおやまつみ大山祇神社に下りて長林寺に戻りましょう。大坊山麓には 6～7 世紀に造られた古墳が点在しています。いくつかを探索してみましょう。

帰りは県道 67 号線を辿って佐野を訪ね、そうしゅう惣宗寺（厄除け大師・天台宗）に参詣し、佐野市郷土博物館を見学して帰路につきます。

日 時：1月17日（日）AM7:00 北小西門集合

行 程：北小 7:10——（国道 293）——佐野・^{いするはら}出流原弁天池——
足利・榊崎八幡宮——（県道 40）——山川長林寺……大坊山……
大山祇神社……古墳群探訪……山川長林寺——（県道 67）——
佐野市郷土博物館——惣宗寺——佐野 SA スマート IC——北小

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

参考書（栃木の山 150、栃木県の歴史散歩、とちぎの社寺散歩、
とちぎの天台の寺めぐり）、

1/25,000 地形図は「足利北部」「足利南部」「田沼」「佐野」

参加費：おとな 600 円、子ども 300 円（ガソリン代等）

保険料（今年度分）1,300 円

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



☞ 本号の内容 ☜

活動案内・1	初日の出を見る会～茂呂山からの展望・山岳同定～	2
活動案内・2	足利・大坊山ハイキング～山上城址と古墳群探訪～	2
表紙の本	三木清著『人生論ノート』より	4
活動報告	芳賀、風薫る山里のみちハイキング ～七井駅より芳賀富士を越えて茂木駅へ+S L 乗車～	10
山口さんの自然講座・1	真珠（パール）のおはなし	13
山口さんの自然講座・2	月報第 37 号のハテナについて	16
こんな虫いました		17
山書談話室		18

三木 清著『人生論ノート』

(1966年10月17日・岩波書店発行「三木清全集」全19巻より第1巻)

旅について

ひとはさまざまな理由から旅に上るのである。或る者は商用のために、他の者は視察のために、更に他の者は休養のために、また或る一人は親戚の不幸を見舞うために、そして他の一人は友人の結婚を祝うために、というように。人生がさまざまであるように、旅もさまざまである。しかしながら、どのような理由から旅に出るにしても、すべての旅には旅としての共通の感情がある。一泊の旅に出る者にも、一年の旅に出る者にも、旅には相似た感懐がある。恰も、人生はさまざまであるにしても、短い一生の者にも、長い一生の者にも、すべての人生には人生としての共通の感情があるように。

旅に出ることは日常の生活環境を脱けることであり、平生の習慣的な関係から逃れることである。旅の嬉しさはかように解放されることの嬉しさである。ことさら解放を求めている旅でなくても、旅においては誰も何等か解放された気持になるものである。或る者は実に人生から脱出する目的をもってさえ旅に上るのである。ことさら脱出を欲している旅でなくても、旅においては誰も何等か脱出に類する気持になるものである。旅の対象としてひとの好んで選ぶものが多くの場合自然であり、人間の生活であっても原始的な、自然的な生活であるというのも、これに関係すると考えることができるであろう。旅におけるかような解放乃至脱出の感情にはつねに或る他の感情が伴っている。即ち旅はすべての人に多かれ少かれ漂泊の感情を抱かせるのである。解放も漂泊であり、脱出も漂泊である。そこに旅の感傷がある。

漂泊の感情は或る運動の感情であって、旅は移動であることから生ずるといわれるであろう。それは確かに或る運動の感情である。けれども我々が旅の漂泊であることを身にしみて感じるのは、車に乗って動いている時ではなく、むしろ宿に落ち着いた時である。漂泊の感情は単なる運動の感情ではない。旅に出ることは日常の習慣的な、従って安定した関係を脱することであり、そのために生ずる不安から漂泊の感情が湧いてくるのである。旅は何となく不安なものである。しかるにまた漂泊の感情は遠さの感情

(次ページへ続く)

なしには考えられないであろう。そして旅は、どのような旅も、遠さを感じさせるものである。この遠さは何キロと計られるような距離に関係していない。毎日遠方から車で事務所へ通勤している者であっても、彼はこの種の遠さを感じないであろう。ところがたといそれよりも短い距離であっても、一日彼が旅に出るとなると、彼はその遠さを味うのである。旅の心は遙かであり、この遙けさが旅を旅にするのである。それだから旅において我々はつねに多かれ少かれ浪漫的になる。浪漫的な心情というのは遠さの感情にほかならない。旅の面白さの半ばはかようにして想像力の作り出すものである。旅は人生のユートピアであるときえいうことができるであろう。しかしながら旅は単に遙かなものではない。旅はあわただしいものである。鞆一つで出掛ける簡単な旅であっても、旅には旅のあわただしさがある。汽車に乗る旅にも、徒歩で行く旅にも、旅のあわただしさがあるであろう。旅はつねに遠くて、しかもつねにあわただしいものである。それだからそこに漂泊の感情が湧いてくる。漂泊の感情は単に遠さの感情ではない。遠くて、しかもあわただしいところから、我々は漂泊を感じるのである。遠いと定まっているものなら、何故にあわただしくする必要があるのであろうか。それは遠いものでなくて近いものであるかも知れない。いな、旅はつねに遠くて同時につねに近いものである。そしてこれは旅が過程であるということの意味するであろう。旅は過程である故に漂泊である。出発点が旅であるのではない、到着点が旅であるのでもない、旅は絶えず過程である。ただ目的地に着くことをのみ問題にして、途中を味うことができない者は、旅の真の面白さを知らぬものといわれるのである。日常の生活において我々はつねに主として到達点を、結果をのみ問題にしている、これが行動とか実践とかいうものの本性である。しかるに旅は本質的に観想的である。旅において我々はつねに見る人である。平生の実践的生活から脱け出して純粋に観想的になり得るということが旅の特色である。旅が人生に対して有する意義もそこから考えることができるであろう。

何故に旅は遠いものであるか。未知のものに向ってゆくことである故に。日常の経験においても、知らない道を初めて歩く時には実際よりも遠く感じるものである。仮にすべてのことが全くよく知られているとしたなら、日常の通勤のようなものはあっても本質的に旅というべきものはないであろう。旅は未知のものに引かれてゆくことである。それだから旅には漂泊の感情が伴ってくる。旅においてはあらゆるものが既知であると



いうことはあり得ないであろう。なぜなら、そこでは単に到着点或いは結果が問題であるのではなく、むしろ過程が主要なものであるから。途中に注意している者は必ず何か新しいこと、思い設けぬことに出会うものである。旅は習慣的になった生活形式から脱け出ることであり、かようにして我々は多かれ少かれ新しくなった眼をもって物を見ることができるようになっており、そのためにまた我々は物において多かれ少かれ新しいものを発見することができるようになってきている。平生見慣れたものも旅においては目新しく感じられるのがつねである。旅の利益は単に全く見たことのない物を初めて見ることにあるのでなく、——全く新しいといい得るものが世の中にあるであろうか——むしろ平素自明のもの、既知のもののように考えていたものに驚異を感じ、新たに見直すところにある。我々の日常の生活は行動的であって到着点或いは結果にのみ関心し、その他のもの、途中のもの、過程は、既知のもの如く前提されている。毎日習慣的に通勤している者は、その日家を出て事務所に来るまでの間に、彼が何を為し、何に会ったかを恐らく想い起すことができないであろう。しかるに旅においては我々は純粋に観想的になることができる。旅する者は為す者でなくて見る人である。かように純粋に観想的になることによって、平生既知のもの、自明のものと同前提していたものに対して我々は新たに驚異を覚え、或いは好奇心を感じる。旅が経験であり、教育であるのも、これに依るのである。

人生は旅、とはよくいわれることである。芭蕉の奥の細道の有名な句を引くまでもなく、これは誰にも一不再ならず迫ってくる実感であろう。人生について我々が抱く感情は、我々が旅において持つ感情と相通ずるものがある。それは何故であろうか。

何処から何処へ、ということは、人生の根本問題である。我々は何処から来たのであるか、そして何処へ行くのであるか。これがつねに人生の根本的な謎である。そうである限り、人生が旅の如く感じられることは我々の人生感情として変ることがないであろう。いったい人生において、我々は何処へ行くのであるか。我々はそれを知らない。人生は未知のものへの漂泊である。我々の行き着く処は死であるといわれるであろう。それにしても死が何であるかは、誰も明瞭に答えることのできぬものである。何処へ行くかという問は、翻って、何処から来たかと問わせるであろう。過去に対する配慮は未来に対する配慮から生じるのである。漂泊の旅にはつねにさだかに捉え難いノスタルヂヤが伴っている。人生は遠い、しかも人生はあわたたしい。人生の行路は遠く

て、しかも近い。死は刻々に我々の足もとにあるのであるから。しかもかくの如き人生において人間は夢みることをやめないであろう。我々是我の想像に従って人生を生きている。人は誰でも多かれ少かれユート



ピアノである。旅は人生の姿である。旅において我々は日常的なものから離れ、そして純粹に観想的になることによって、平生は何か自明のもの、既知のもの如く前提されていた人生に対して新たな感情を持つのである。旅は我々に人生を味わさせる。あの遠さの感情も、あの近さの感情も、あの運動の感情も、私はそれらが客観的な遠さや近さや運動に関係するものでないことを述べてきた。旅において出会うのはつねに自己自身である。自然の中を行く旅においても、我々は絶えず自己自身に出会うのである。旅は人生のほかにあるのではなく、むしろ人生そのものの姿である。

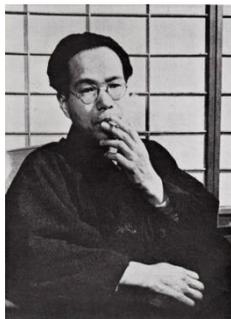
既にいったように、ひとはしばしば解放されることを求めて旅に出る。旅は確かに彼を解放してくれるであろう。けれどもそれによって彼が真に自由になることができると考えるなら、間違いである。解放というのは或る物からの自由であり、このような自由は消極的な自由過ぎない。旅に出ると、誰でも出来心になり易いものであり、気紛れになりがちである。人の出来心を利用しようとする者には、その人を旅に連れ出すのが手近かな方法である。旅は人を多かれ少かれ冒険的にする、しかしこの冒険と雖も出来心であり、気紛れであるであろう。旅における漂泊の感情がそのような出来心の根底にある。しかしながら気紛れは真の自由ではない。気紛れや出来心に従ってのみ行動する者は、旅において真に経験することができぬ。旅は我々の好奇心を活発にする。けれども好奇心は真の研究心、真の知識欲とは違っている。好奇心は気紛れであり、一つの所に停まって見ようとはしないで、次から次へ絶えず移ってゆく。一つの所に停まり、一つの物の中に深く入ってゆくことなしに、如何にして真に物を知ることができるであろうか。好奇心の根底にあるものも定めなき漂泊の感情である。また旅は人間を感傷的にするものである。しかしながらただ感傷に浸っていては、何一つ深く認識しないで、何一つ独自の感情を持たないでしまわねばならぬであろう。真の自由は物においての自由である。それは単に動くことではなく、動きながら止まることであり、止まりながら動くことである。動即静、静即動というものである。人間到る処に青山あり、という。この言葉はやや感傷的な嫌いはあるが、その意義に徹した者であって真に旅を味わることができるであろう。真に旅を味い得る人は真に自由な人である。旅することに

よって、賢い者はますます賢くなり、愚かな者はますます愚かになる。日常交際している者が如何なる人間であるかは、一緒に旅してみるとよく分るものである。人はその人それぞれの旅をする。旅において真に自由な人は人生において真に自由な人である。人生そのものが実に旅なのである。

『人生論ノート』メモ

哲学者、社会評論家、文学者として昭和初期に華々しく活躍した三木清による、珠玉の名論文集。死、幸福、懐疑、習慣、虚栄、名誉心、怒り、人間の条件、孤独、嫉妬、成功、瞑想、噂、利己主義、健康、秩序、感傷、仮説、偽善、娯楽、希望、旅、個性、の23のテーマについての、著者の深い教養と思索から生み出された、含蓄に富んだ内容となっている。初出は「文学界」1938（昭和13）年6月～1941（昭和16）年10月、ただし「個性について」は「哲学研究」1920（大正9）年5月、「後記」は「人生論ノート」1941（昭和16）年8月・創元社、「旅について」は不詳。

人物紹介・三木 清



みき きよし（1897－1945）、京都学派を代表する哲学者。

1897（明治30）年1月5日、兵庫県揖保郡平井村小神（後の龍野市、現・たつの市揖西町）に生まれる。第一高等学校在学中、西田幾多郎の『善の研究』により哲学に興味を持つ。また宗教にも関心を持ち、特に浄土真宗大谷派に接近。1917年京都帝国大学に進み、西田幾多郎に学ぶ。他に田辺元、左右田喜一郎らにも影響を受ける。卒業後は大谷大学、龍谷大学で教鞭をとり、1922年、宗教哲学の波多野精一の紹介で、岩波茂雄の資金的な支援を受けてドイツ・フランスに留学、ハイデルベルク大学でリッケルト、マールブルク大学でハイデggerらに師事。第一次大戦後のインフレに喘ぐドイツには相対的に資金潤沢な日本人留学生等も多く、古参の大御所から少壮の新進学者まで多くの人々と交わる機会を得た。大内兵衛、羽仁五郎らとの交流を深めたのもこの頃である。1924年パリに移りパスカルを研究。1925年帰国、翌年の処女作『パスカルに於ける人間の研究』で哲学界に衝撃を与える。1927年法政大学文学部哲学科主任教授。マル

クス主義哲学、西田哲学を研究し唯物史観の人間学的基礎づけを試みる。この年の岩波文庫の創刊にも深く関わり、巻末の「読書子に寄す」の草稿を書く。1930年治安維持法違反で起訴・投獄され教職を失うが、その後活動の場を文筆活動に移し、活発な著作活動を展開。一方、近衛文麿の私的政策研究団体「昭和研究会」に積極的に参加し、抜群の語学力を生かして、ヨーロッパの最先端の知的成果を取り入れながら、その哲学的基礎づけ作業を担当。総力戦体制に対する抵抗と、その合理性に何らかの社会変革を期待しての関与という、二面性を抱えた当時の典型的な転向知識人のひとりであった。同会は1940年、大政翼賛会への発展的解消という形で解散を余儀なくされ、この活動は単なる戦争協力へと変質していく。マルクス主義をより大きな理論的枠組みのなかで理解し直す「構想力の論理」を企てていたが未完に終わる。最後には親鸞の思想に再び惹かれる。1945年再度反戦容疑（治安維持法違反）で逮捕され、終戦を迎えるも釈放されず、衛生環境が劣悪な豊多摩刑務所にて腎臓病を悪化させ、1945（昭和20）年9月26日、48歳で獄死。この死の実態が世に知られたことにより治安維持法が漸く撤廃される。この年には西田幾多郎、戸坂潤も亡くなり、哲学界にとって喪失の大きい年となった。蔵書は法政大学に所蔵。1997年、龍野市名誉市民。

主要著作（全集もあります）

『パスカルにおける人間の研究』（1926年のち岩波書店 1980）

『唯物史観と現代の意識』（岩波書店 1928）

『構想力の論理』（岩波書店 1939）

『哲学入門』（岩波新書 1940のち多数重版）

『哲学ノート』（河出書房 1941のち中公文庫 2010）

『読書と人生』（小山書店 1942のち講談社文芸文庫 2013）

『人生論ノート』（創元社 1947のち新潮文庫 2011）



繰り返し出版されている三木清の著作
時代を越えて愛読されていることがわかる

芳賀、風薫る山里のみちハイキング
 ～七井駅より芳賀富士を越えて茂木駅へ＋SL乗車～
 11月22日（日） 天気・くもり

益子駅西側の駐車場に車を置き、「関東の駅100選」の駅舎を眺めながら列車を待ちます。真岡鉄道のカラフルなディーゼル車（車内で発券、検札）でひと駅、次の七井駅で下車し、「風薫る山里のみち」として整備された道を案内札に導かれるようにたどって、閑静な住宅地から郊外へ、芳賀富士（272m）を目指します。狭まる谷間を区切りながら上って行く耕地（谷戸という）を方々に目にしますが、安善寺はそんな谷戸田の奥に芳賀富士の麗姿を背負うように建っていました。その先の車道を登りながら聞こえるのは、遙か山向こうのツインリンク茂木からの二輪車の走行音、何の催しやら。傍らの草むらでは蛾が飛び回っています。恐らくフユジャクガの仲間の婚姻飛行でしょう。鬱蒼とした杉木立の山中の長い石段を登っていく熊野神社は、入口に白い幟旗が立てられ、中腹の社殿で地元の祭事に氏子連が賑わっていました。山頂で昼食。残念ながらもずっと曇天で、遠望は利きません。中腹の斜面を這うように広がる麦畑を眺めながら山を下りて、里山にはさまれた川沿いのなだらかな平地を延々と歩いていきます。時間がどんどん過ぎてそろそろSLの時間が気になる。丈六阿弥陀堂などのある安楽寺は遠巻きに見送り、“隊長”の提案で茂木駅まで近道することにして、谷戸田が展開している谷の一つに入って行きます。次第に道なき道となり、藪の中のぬかるみに難渋しながら、やっと頂とおぼしき茂みを抜けると、耕作地が広がる反対側の斜面に。畑仕事をしている人に尋ね、茂木駅への道を確認して進みます。山を下るとすぐ川沿いの市街地に入りました。

帰りは茂木駅からSLに乗って益子まで戻ります。沿線にはSL見物や撮影の人影が多く見られ、人の鼓動のような音を立てながら走る蒸気機関車が愛されていることを実感しました。秋の芳賀野散歩、というには、終日日も差さぬ、ちょっと寂しい山野歩きでした。

参加者

石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計4名）



芳賀富士山頂にて

✿ 見た植物

(針葉樹) アカマツ、スギ、ヒノキ、(常緑樹) シラカシ、

(落葉樹) ウリカエデ、エノキ、カキ(実)、クサギ、クヌギ、コナラ、ムラサキシキブ(実)、ヤマウルシ、ヤマザクラ、

(草の花) セイタカアワダチソウ(以下春の花) イヌガラシ、オオイヌノフグリ、タンポポ、ナズナ、ホトケノザ

✿ 見た・聞こえた鳥

スズメ、ツグミ、ハシブトガラス、ムクドリ

✿ 芳賀路写真集



カラフル+デコ列車(左)でひと駅、七井駅(右)で降りる

↑真岡鉄道・益子駅



益子焼の
巨大な壺が
飾られていた→



安善寺本堂内の透かし彫りの欄間



本堂前にて



七井駅から
「関東ふれあいの道」
として親切な案内板が



谷を這い登る耕地の先に
“芳賀富士”が見える(左)

方々に展開する麦畑
緑色が鮮やか(右)



里山の秋の彩り：カキ



ヤマウルシ



ムラサキシキブ



ウリカエデ



大木いろいろ
左上：エノキ、右上：クヌギ、
中：ヤマザクラ
左下シラカシ、右下コナラ



←今回は見送った安楽寺
本堂（右）と丈六阿弥陀堂

蒸気機関車に乗車
益子で下車後も
じっくり眺める→



芳賀野の風景
紅葉の里山の間に耕作地が広がる



真珠（パール）のおはなし

栃木県も私のいる奈良県も海がないのに、なぜ真珠？と思われるでしょう。冠婚葬祭のとき、女性には真珠のネックレスを身に着けている人を多く見かけます。そこで真珠にまつわることや手入れの仕方、それに宝石についても少しふれてみたいと思います。



真珠は洋の東西を問わず、古い時代には幸福を招く宝物と信じられていた。ヨーロッパではダイヤモンドよりも高価であった時代もあり、天然真珠を見つけた人の喜びようが伝わってくる。古代ローマの著述家プリニウスは、クレオパトラが高価な真珠のイヤリングをブドウ酒に溶かしアントニウスへの愛のあかしとして飲んだ、と書き残している。また、胃潰瘍や熱が出たときなど、幅広い病気の特効薬と信じられていた。真珠がどうしてできるか分らなかった時代、アラビアでは神様の涙が固まったもの、ヨーロッパでは開いている貝に雨が入って出来る、中国では2匹の竜が空で戦っているとき口からこぼれたものなどと想像していた。オーストラリア原住民アボリジニは、真珠を探す日本人を岩絵に残している。日本で一番古い真珠は、奈良・東大寺三月堂のふくろうけんじやくかんのんぞう不空羅観音像にはめ込まれているもので、アコヤガイかアワビから採れたものと思われる。真珠を作る技術がなかった時代は、これらの貝やカキガイが作った天然真珠しかなかった。日本から見つかったカキガイの化石から真珠が発見されたこともある。

貝殻は、表面から殻皮、りょうちゅうそう稜柱層、真珠層になっていて、体組織のしんじゆのう真珠囊から真珠物質を出して殻の内側表面に発達させていく。

なぜ丸い真珠ができるかということだが、真珠囊と体組織の間に異物が入ったとき、外へ出そうとするもののどうしても出ないとき、異物の表面に真珠層を巻きつけていく。これが大きくなって丸い真珠となる。貝殻の内側に付いた状態では、半球の真珠となる。真珠はどんな貝にもできるが、色が悪いうえに小さいので宝石としての価値がない。

現在、日本で真珠を養殖する貝はアコヤガイであり、真珠貝とも呼ばれている。この他、黒真珠を作るクロチョウガイやシロチョウガイ、マベガイなどのウグイスガイ科である。このほか中国などでは、淡水貝のカラスガイの仲間を真珠養殖している。細長くいびつな形のものだが、これも立派なネックレスに加工される。

アコヤガイによる真珠養殖は、1893年頃、西川藤吉と御木本幸吉の両氏が始めた（ミキモト真珠店の名前を御存じの方もいることでしょう）。10年の歳月をかけて丸い真珠を作ることに成功した。この頃もう1人、見瀬辰吉氏も真珠養殖に成功し、特許を出願している。

アコヤガイを幼貝も含めて採集する。これを母貝といい、養殖柵で育てることから始め、10センチほどに成長した貝に核を入れる。核は淡水二枚貝のカワシンジュガイやカラスガイの殻を丸くしたものを外とう膜の一部を添えて埋め込む。一時セラミック製の核が使われたこともあるが、うまくいかなかった。貝にとっては違和感が強く、外へ出してしまうのである。さて、このようにして真珠が大きくなるまで4年ほどかかり、大きい真珠は1センチくらいの大きさになる。その間にヒトデやホラガイなどの天敵から守ったり、養殖柵の掃除、台風や赤潮が発生すれば養殖柵を移動させる、といった気のぬけない作業である。こうしても形や色、大きさに本当に良いものは水揚げ量全体の5%だという。三重県伊勢志摩の内海でも、さかんに養殖されているが、湾の違いにより、真珠の色が微妙にちがうという。真珠は炭酸カルシウムできているので、過酸化水素で漂白したのち染色して、ネックレスの玉の色をそろえられることもある。これらはすべて日本独自の技術である。こうして完成した製品の多くは、ヨーロッパなど外国に輸出されている。

マベガイ（写真左）は、実験的には丸い真珠を作ることに成功しているが、貝殻の内側に核を埋め込むので、半球真珠しかできない。沖縄などで養殖されていたが、なにぶん熱帯の貝なのでうまくいかず（量産できず）、コストの方が大きいので次第に衰退していった。半球の真珠はブローチなどに加工される。写真のマベガイは殻に核を2つ固定して作らせたもので、今では貴重なものである。阪神・淡路大震災のときに欠けてしまったのが残念だ。

世界で一番大きい真珠はハトの卵くらいの大きさがある。これはシャコガイなどの大きい貝から発見されたものなのだろう。クロチョウガイ（写真右）は、貝殻のふくらみが弱いので、大きい真珠は少ない。これほど大きいものはフィリピンで採れ、ときには真珠よりも高価で売られるという。



←マベガイ(左)と
クロチョウガイ

アコヤガイの真珠の飾り額→

(写真提供:山口さん)



〔真珠の手入れのしかた〕

真珠は動物起源の宝石ですから汗は大敵です。このほかヘアスプレーや香水がついたままにしておくと光沢が鈍る原因となります。ですからヘアスプレーや香水は、すませたあと手を洗ってから身につけて下さい。帰ってからは、やわらかい布できれいにふきとります。洗剤は絶対に使ってはいけません。もうひとつ、サンゴも基本的には同じで、汗がついたままでは変色の原因となります。化学薬品も大敵です。湿らせたやわらかい布でふきとって下さい。しもう時は、光が当たらない所へ。宝石箱を持っている人でも、いろいろな宝石とかさねて入れている人がいますが、キズが入る原因です。



〔誕生石〕

誕生石は1世紀頃のヨーロッパで考え出されました。自分の産れた月の宝石を持っていると幸福になるという言い伝えによるもので、広く普及したのは18世紀のポーランドからです。これには、もっと多くの宝石を親しんでもらおうという宝石商の意図もあります。自分の好きな宝石、気に入った宝石が一番いいわけですから、誕生石にこだわる必要はないと思います。



※ 誕生石の画像は原石の写真を集めてみました。(編集人)

月報第37号のハテナについて



まずはヤナギ、ポプラについてです。

ヤナギ科はヤナギ属、ハコヤナギ属、オオバヤナギ属、ケシヨウヤナギ属の4属があります。この中で、ヤナギ属の同定が一番むずかしいものです。シダレヤナギ、ウンリウヤナギ、アカメヤナギ、クロヤナギ、ヤマネコヤナギ、ヤチヤナギなどは特徴がはっきりしていますが、これ以外のヤナギは大変よく似ているので、阿部先生のおっしゃる通り同定が大変むずかしいのです。ヤナギは雌雄異株なので、雄花と雌花を別の株から採集し、葉が開いたら、両株の葉が一致して初めて名前を付けられるという複雑なものです。おまけにヤナギは雑種が得意な樹木ですから、そんな簡単なものではありません。大阪市立自然史博物館の植物研究室におられたある先生は、ドイツと言われたかヤナギの大家に標本を送り同定を求めましたが、なかなか返信が返ってこないとのことでした。また、顕微鏡的なものともかく、町の中に堂々と立っている大きいヤナギの名前が分からないのは、博物館としても恥ずかしいことだと言っておられた。このようにヤナギ属は、難解な種類がたくさんあるので私も苦手な樹木です。

ハコヤナギ属の樹木は種類が少なく、特徴がはっきりしているので同定はたやすいでしょう。このグループにはポプラ(セイヨウハコヤナギ)や、日本の山ではヤマナラシ(ハコヤナギ)などがあります。ヤナギ属の葉とはちがい、横幅が広い形をしています。木は大きく(高く)なればなるほど葉の数が増えます。そこでこの仲間は、風が吹けば横長の葉が左右にゆれることで、奥の葉にも光が届く構造になっています。葉と葉がこすれ合いザワザワとした音をたてることからヤマナラシの名前がつけました。

もう一つ、クワガタムシの幼虫のエサについてです。クワガタムシの種類と、その幼虫のエサとなる朽木を作ったキノコの種類は関係があるかということですが、木を腐らせるキノコとしては、サルノコシカケ類が筆頭にあげられます。これ以外のキノコでも、木から生えるキノコは、木の栄養分を吸収して腐らせていきますから、サルノコシカケ類同様、木材腐朽菌と言えるでしょう。

オオクワガタ以外のクワガタムシは、木を腐らせるキノコの種類は関係ないと思います。コクワガタの幼虫はかなり腐った木も食べるが、ノコギリクワガタは、まだ堅い朽木を食べます。このようにクワガタムシの種類によって、腐る程度のちがうもの

(次ページへ続く)

をエサにしているからです。すべてのクワガタムシが同じ段階の朽木をエサにしていると、たちまちエサ不足になるでしょう。現在、自然がどんどんこわされていく以前から予見していたかのように、それぞれの種が生き残るために身につけたことです。

オオクワガタは今でも高価で売買されているので多くの人が幼虫飼育を試みましたが、ことごとく失敗したので、オオクワガタの幼虫は飼えないと言われました。けれども、世の中には観察力の鋭い人がいるものです。オオクワガタの幼虫がいる朽木には必ずスエヒロタケ科のスエヒロタケが生えていることに気付いたのです。スエヒロタケは、他の木を腐らせるキノコとはちがひ、木の養分を残したまま木を腐らせます。つまりオオクワガタの幼虫は栄養分の高い朽木をエサとしていたのです。これが分かってから、オオクワガタの幼虫飼育ができるようになりました。

カブトムシもそうですが、クワガタムシも同じ種類でも、成虫にはずいぶん大きさが違うものがあります。これは、幼虫時代のエサの善し悪しに関係があるといえます。ここなら大丈夫という朽木に卵を産むのですが、場所によって雨が降らなければ、朽木が乾燥してしまいます。恐らく、このような所で育った幼虫は栄養失調のため、小さい成虫にしかならないと思われます。

※ スエヒロタケ…3センチほどのキノコで、ヒダの構造から、モミジの葉のようにたてに裂けたものもあり、古くなると茶色になります。胞子を吸い込んだ人の肺の中で発芽したことが報告されています。



山口さんの自然講座1・2共（山口龍治）

🌀 こんな虫いました 🌀



集めてきて

水槽の土の中に埋めてある
春までおやすみなさ〜い



店の隣の空地の草むしりをしていたら、草の根元でたくさんの幼虫が眠っていました。カブトムシの幼虫より小型です。コガネムシの仲間の幼虫でしょう。このまま冬を越して、来年の春以降に羽化するものと思われます。何になるのやら、無事に出て来るのが楽しみです。

阿部良司→白坂正治氏（10月号にご紹介した白坂氏からのお便りへの返書です）

お便りありがとうございます。

『山と溪谷』『心の行方を追うて』（共に第一書房）、いずれも上製函付ですが、版を重ねると並製裸本になりますね。『山と溪谷』の再販本の函には白い紙が貼り付けてありますが、初版は何も貼り付けておらず、そのためなのか初版本の函だけがどれを見てもきたなく灼けています。函背の上下に三角マークがあるのも初版の特徴ですね。

『日本アルプスと秩父巡礼』の表紙は麻を使っているのでしょうか。カバーが残っているくらいならば、本もきれいに保たれているのですが、どうしても背の上下がボロボロになってしまう。『青葉の旅 落葉の旅』、ここには第一書房版、六合書院版、東西出版社版の3冊があります。どれも似たような表紙画だな、と思いながら繙いてみると、装幀は第一書房版が野口義恵、六合書院版が茨木猪之吉、東西出版社が中村清太郎。いずれも並製裸本。『心の行方を追うて』はここに白玉書房版もありますが、これも並製裸本。『わが散文詩』は第一書房版と朱雀書林版がありますが、いずれも並製（下図参照）。第一書房版には帯が付いています。いずれの表紙にも秋の花でしょうか、清楚に描かれた植物画。同じ画家によるものという印象。朱雀書林版には装幀富田通雄との記載があります。ここにある『高原のあけ暮れ』は東海書房版でやはり並製裸本。昭和22年の発行で紙質は悪く全体が茶色に灼けています。

多くの本に接する度に、それが完本でないことに気付く。完本を求める旅は無限に広がって行きます。

そんなことを調べていたら、本の山の中から田部重治著『人生の旅』（第一書房）という見たこともない？本が出てきました。すでに廃棄してしまいましたが、かつては晴山書房が年に2回、古書目録を送ってきました。田部重治の著書の本にも力を入れておられ、私の書架にそれぞれ揃っている田部重治の著書の多くは、その店主岩瀬氏

（次ページへ続く）



田部重治『わが散文詩』2種

←昭和17年7月30日発行
第一書房版（装幀：富田通雄）

昭和18年12月18日発行→
朱雀書林版（装幀の明記はないが
第一書房版と同じと思われる）



に譲っていただいたものです。

ここ数年、田部重治関係の蔵書には変化がなく、淋しい限りです。古書目録に頼らざるを得ない田舎ぐらしの宿命でしょうか。

次号から数回にわたり、「表紙の本」で三木清を取り上げます。

すでに冬となってしまいましたが、読書の秋に因んで本や読書についての著作を中心に。三木は「箱入りの本」に文句を言っていますが、函から気遣いながら本を出す手間で考えると、確かにカバーだけ付いていれば充分ですよ。がっちりカバーしてくれるのは函ですけど。



追伸

田部重治の編集によるアンソロジー『スキーの山旅』。

ここにあるのは昭和8年発行なる普及版ですが、上製本カバー付。目録で見た記憶によると昭和5年発行の初版は函付であるようですね。背はこげ茶色に灼けて全体が汚れていますが、カバー付上製本というのもなかなか味のあるものです。

月報第15号で取り上げた野中至著『富士案内』。これは初版で並製の裸本ですが再版は上製カバー付ですね。これも古書目録で一度見ただけですが。

白坂正治氏→阿部良司（早速お返事をいただきました）

前略

『月報第38号』と御手紙ありがとうございました。

“完本を求めらる旅”は果てなき浪漫(ロマン)に満ちています。本体が「読む」行為なら函(箱)、カバー(元パラ)、帯は「詠む」ものだと思います。それぞれの本が新本だった時を目撃できなかった分、それらから本全体の風格、味わいを感じているのかもしれませんが。著者と出版社の思いの融合を汲みたいといえるでしょうか。帯に印刷されている書評的文章は、自分以外という意味で客観の田部重治の眼を育ててくれます。

次号から三木清を取り上げられるとか。詳細な交流模様は分かりませんが、法政大学の教員つながりで少なからずえにはあったと見え、田部先生の英文学著作の書評を綴ってますね。

草々 ‘15.12.14

追伸 山岳書(を中心とした)目録を出す古書店が年々歳々減っていくのは淋しい限りです。

自然観察クラブ 会費納入のご案内

- ☆ 年会費（個人または家族） 1,800 円
// （会報不要または直接取りに来られる方） 600 円

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

今年1年お世話になりました。

会報の発行が遅れがちでしたが、

お付き合い下さりありがとうございました。

来年も有意義な活動を展開していきたいと思っておりますので、

温かくお見守り下さい。

また時には活動への参加、投稿などもどうぞよろしく。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第39号

2015年12月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

検索